

家族形成におけるセクシュアリティとエスニシティ
—海外へ移住する韓国人性的マイノリティ女性を事例に—

申 知燕 (お茶の水女子大学)

従来の移民研究においては、国際人口移動のフローや、移住先地域における移住者の分布と生活を捉えるにあたって、多くの移住者が共通して示す傾向性に重きを置いてきた。例えば、特定の地域に集住している少数民族、あるいは留学生や駐在員、出稼ぎ労働者のように、一定数以上の人口規模があり、まとまった特徴を持つ集団を主な対象として、人口移動や空間形成の一般法則を見出す分析が多くなされてきた。このような分析は、移住者集団の代表的な特徴を描き、多文化共生と他者理解を促すための重要な視点を提供してきたが、一方で移住者集団のなかでも複数のマイノリティ性を持ち、比較的共通項の少ない移住者を不可視化してしまうという側面もあった。

そこで、本研究では性的マイノリティの国際移住に焦点を当て、性的指向がいかに関係形成のための国際移住を触発させるのか、また移住先の選定や移住の方法と経路、移住後の生活にどのような違いをもたらすのかを明らかにし、セクシュアリティとエスニシティの家族形成への影響に注目することの学術的・社会的意義を考察することを目標とする。

本研究では、海外移住経験があるか移住を検討している、韓国出身のシスジェンダーレズビアンおよびバイセクシュアル女性 15 名に対して、2018 年から 2023 年にかけて対面および Zoom でのインタビュー調査を実施した。インタビュー調査では、生い立ちと性的指向、当事者コミュニティとの関わり、移住の動機、移住先の決定と準備過程、移住後の生活や価値観の変化、現状認識と将来の計画などに関する回答をもとにライフコースを把握し、かれらにとっての家族形成と国際移住の意味を確認した。

事例調査からは、韓国における性的マイノリティへの社会的抑圧は制度の不備や社会的偏見として現れること、また回答者たちはそれらの差別を回避し、自身のキャリア形成や家族形成を実現するために海外への移住を選択していることがわかった。多くの場合、同性の交際相手との婚姻、あるいは差別的な視線のない環境下での長期的なパートナーシップの維持が国際移住を考慮する契機となる。ただし、女性に対する差別の少ない環境や、キャリア形成の可能な環境を求めなか海外移住が先行し、その上で家族形成を考え始める場合もあり、必ずしも性的指向や家族形成への希望だけが移住の原因ではないことに留意が必要である。

また、家族形成を念頭に置いた際の移住先や移住方法は、移住先各国の同性婚関連法律と移民政策によって非常に流動的であり、性的マイノリティ移住者は常にその変化を確認しながら、戦略的に行き先や移住時期を設定しなければならない。個々の移住者の置かれた状況や職業、パートナーの状況、移住時期によって行き先はそれぞれ異なるが、性的マイノリティの人権を保障する制度や、同性婚もしくは同性婚に準ずる制度の存在する国、そして長期滞在の可能なビザが取得できる国・地域を考慮した結果、かれらの移住先はグローバルノース諸国に絞られ、北から北への移動がみられるようになる。状況によっては、より安定的な滞在のために、母国と移住先を行き来する、もしくは第三国に再移住するといったトランスナショナルな移動もみられる。

また、具体的な移住先地域としては大都市圏が好まれる傾向がある。これはジェンダー、性的指向、人種、国籍、職業、言語能力など、自身が持つ複数のマイノリティ性による差別の可能性を天秤にかけながらも、より多様性に恵まれ、マイノリティに対する差別禁止のコンセンサスが形成されている都市部に身を置くことで、可能な限りマイノリティとしての不利を希釈し、自身とパートナーの安定的な生活を手に入れようとするからである。

以上のような事例から、国際移住の議論にセクシュアリティが加わることで家族形成の議論が浮かび上がり、インターセクショナル리티の一側面を提示できるということに注目する必要があると考えられる。

*本研究は JSPS 科研費 JP21H04407 (性的指向と性自認の人口学の構築—全国無作為抽出調査の実施) による助成を受けたものである。

(キーワード: 国際移住、性的マイノリティ、トランスナショナリズム)